

小林照明

ひとりぼちの流れ星

著者紹介

小林 照明 こばやし てるあき 1954 (昭和29)年, 福岡県久留米市に生まれる。父を三歳, 母を六歳で失い, 祖母に引きとられて, 福岡県浮羽郡の大石小学校と大春中学校を卒業。青果市場をはじめ, 大工・左官・土方などのしごとにつき, 過労でたおれ, 現在療養中。詳しくは恩師 佐々木先生の「あとがき」を参照。

著者の連絡先は, 福岡県朝倉郡杷木町穂坂

佐々木俊郎先生 気付

ひとりぼっちの流れ星

1971年12月15日 第1刷発行

¥ 680

著 者	小 林 照 明
発行者	東京都千代田区西神田 1-2-15 石合ビル 崔 容 徳
印刷者	東京都目黒区上目黒 チューエツ

発行所 東京都千代田区西神田 1-2-15 石合ビル
株式会社 太平出版社 ©

電話東京291-9744・9752, 294-7083 振替東京99563

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

小林照明

ひとりぼっちの流れ星



星の工

[illegible]

小林照明
ひとりぽっちの流れ星
大工日記・土方日記

刊行者まえがき

太平出版社

1 この本は、小林照明君こばやしあきが一九六八（昭和四三）年九月から六九年十二月までつづけた日記をまとめたものです。

2 小林君は、一九五四（昭和二九）年四月、北九州の福岡県久留米市に生まれましたが、幼ないときに両親を失い、兄弟とも分かれ、祖母にひきとられて小・中学校を卒えました。この間も、農業などの手伝いに追われて学校も欠席がちだったことは、恩師の佐々木先生の「あとがき」に述べられているとおりです。

3 小林君の日記は、毎日の長時間におよぶ激しい労働のあとにボールペンや鉛筆で疲れた文字で書かれているために、原文のなかには判読しにくいところも少なくありませんでしたが、今回の出版にあたっては、できるだけ原文を忠実に再現するように努力しました。

4 日記の終わりがさきりに肉体の苦痛を訴えていた小林君は、腎臓炎じんぞうえんでたおれ、医師に就労を禁じられているのを血尿におびえながら働きつづけておりました。が、ついに一九七〇（昭和四五）年春、久留米市社会保険第一病院に入院、のち退院して、治療をつづけております。

5 少年らしい旅へのあこがれ、絵の県展入選や一べんで運転免許試験にパスしたことをすなおに純粹に喜んでいるところをのぞいては、孤独と貧困と疲労と苦痛を訴えつづける小林君の日記の原文を読むことは、編集部にとっては少なからぬ苦痛でした。

しかし、「俺の母も土方をしていたからなあ」と「死んで一二年め」になる母や、はなればなれになっている兄や姉を思いつづけながら精神的・肉体的苦痛に耐えている小林君の日記を、わたくしたちは「経済大国」に「高度成長」をつづけていた日本の「下請けの下請けのまた下請け」の零細企業に働く一五才少年が、わが身を削ってつづった重い「時代の証言」として見ないわけにはいきませんでした。

かならずしも巧みに書かれているわけではない小林君の日記を、わたくしたちが公刊することを思いたった所以です。

6 なお、北九州の地域語（方言）や特殊な用語については、行間にルビの形で、または巻末の注で、かんとんに説明をくわえたり、図版をそえておきました。

7 小林君への通信その他は左記へお願いいたします。

福岡県朝倉郡杷木町穂坂

佐々木俊郎 気付

ひとりぼっちの流れ星 目次

はじめに..... 太平出版社編集部 8

第一編 大工日記	大空は海より大きく、人の心は大空より広い.....	13
I	よおし、一人前になるまでがんばるぞ.....	14
II	自然は人間の心を豊かにする.....	34
III	僕も職人のはしくれだ.....	50
IV	お母さんの世界に行きたい.....	64
V	何という人間の美しさ.....	78
VI	肉と鉄の勝負だ.....	87
VII	俺は孤独で人生を終わってしまうのか.....	93
VIII	日記というものを書いた方がいいものかどうか.....	103
IX	戦争では人間を殺しあうのが当然なのか?.....	121
X	糸一本の幅.....	137

XI	星のちがう世界に生まれた自分は	151
----	-----------------	-----

XII	県展入選	160
-----	------	-----

第二編	土方日記 青春というものは僕にはないのか	163
-----	----------------------	-----

I	汗が目流れこむ	164
---	---------	-----

II	反抗する気持ちはノドまで	176
----	--------------	-----

III	構造、法令とも一回でパス	177
-----	--------------	-----

IV	弱い心と強い心が火花をちらす	191
----	----------------	-----

V	下請けの下請けのまた下請けだ	203
---	----------------	-----

VI	人間らしく生きたいノ	208
----	------------	-----

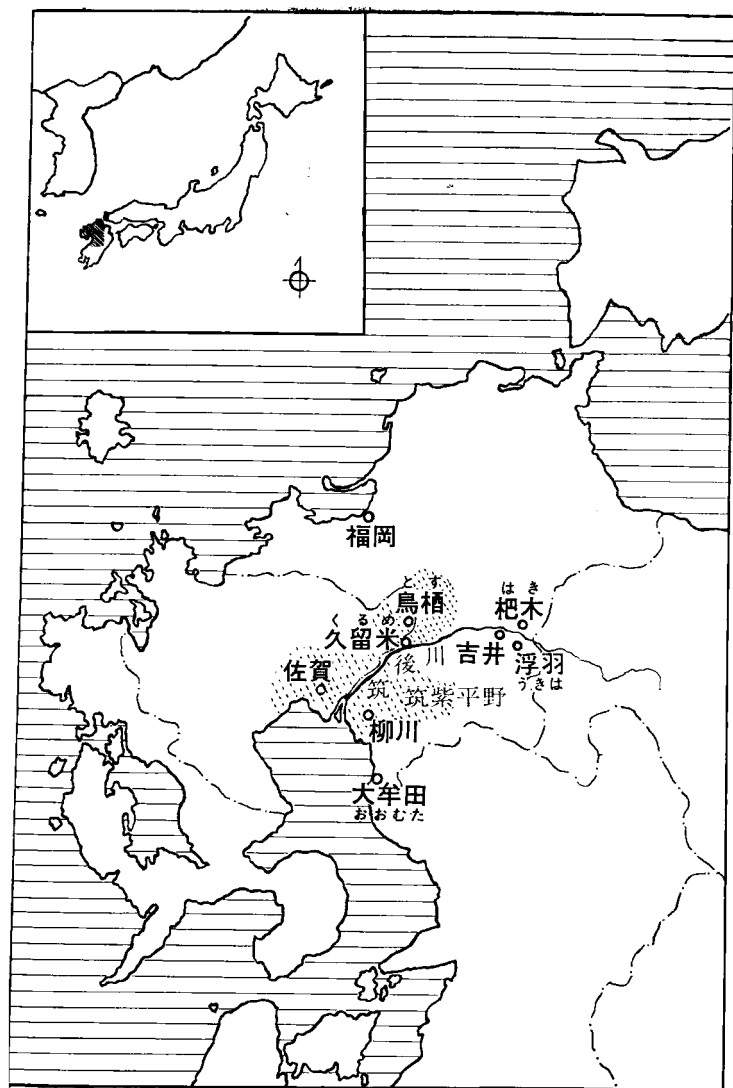
VII	白い白い雪のように飛んでみたい	212
-----	-----------------	-----

注

	久留米・鳥栖地方の地図	217
--	-------------	-----

	あとがき——この日記を多くの若い人たちに	219
--	----------------------	-----

佐々木俊郎



第一編

大工日記Ⅱ 大空は海より大きく、人の心は大空より広い

I よおし、一人前になるまでがんばるぞ……

一九六八年九月一日

きょうは、朝は寒く、昼はあたたかだった。気持ちよさそうだ。十時頃鳥栖^{とす}へ行く。町はハデな明るさだったが、僕はあまり気持ちが悪くはなかった。

龍さん方で昼食をして、すこし話をきいた。龍さんの奥さんにはとてもお世話になっている。大工の弟子に入る前のことだ。そのとき奥さんから僕は注意を受けた。涙を流してまで言ってくれた。「一人前になるまでしっかりやって、がんばって」と。僕は心がジーンとした。そのとき、僕も希望に燃えていた。よおし、一人前になるまでがんばるぞ……。

九月二日

朝早く起きた。早いといっても六時四十分。仕事に出ると荷物を取りに行った。もちろん材木だ。ずい分待たされた。品物がなかったのだろう。吉村材木店だ。この主人は養子だ。とてもおじいさんにしかられていた。気の毒にと思った。しかられても口一つ出さない。えらいなと感じた。僕も大工の弟子になったのだから、見ならわなくちゃ……。自分にできるかなと思った

が、できなくてもやらねばならぬ。社会の人はみな、がまんして生きているのだ。

九月三日

昼から雨が上がり、すかっと晴れた。重夫さん方の土台つけに行く。四人だった。僕の仕事は土台をクレオソートでぬることだ。クレオソートが顔につくと、ひどくヒリヒリ痛む。それに、ものすごくくさい。でも、ついにやりとおした。

帰って七時すぎに風呂にはいると、疲れがとれていくようだ。水のことを考える。水は、人間にとって大事だというが、簡単にすてている。口で言うこととすることがあわない。水は下でこぼこでも、表面は水平になる。珍しいと思う。人間も水のように正しく水平になってもらいたいものだ。

九月四日

朝から建家の用意で材木運びだった。何回も何回も汗が流れる。

昼食を食べて五分位すわっていると、小犬がきてねそべった。尻から十二指腸(?)が半分ほど出ている。それがたてよこに、のびたり、ちぢんだりして体が自由に動いている。便利だなあと思った。人間の心があんなに変わってほしいへんだ。だが僕はけっしてその虫をにくまない。